

人間と河川の関係を転換する

ミズベリング

水辺に発達してきた 人間社会

古代の四大文明はエジプトのナイル、メソポタミアのチグリスとユーフラテス、インドのインダス、中国の長江と黄河というように、すべて大河の岸辺に発展してきた。河川は生活用水の確保、農耕作物の栽培、周辺地域への移動など多数の人々が生活し交流する手段を提供してくれるからである。それ以後も世界の巨大都市の多数は川沿いや海沿いの土地に発展してきたが、最近になり、その土地の利用に急速な変化が発生している。

ニューヨークのマンハッタンの際は、ハドソンリバーとイーストリバーという大河であり、船舶が交易手段の中心の時代には川岸は工場や

倉庫に占拠されていた。しかし二次産業が都心から撤退して工場や倉庫は廃墟になったが、三次産業が中心の時代になった現在、廃墟は時代に対応した空間に変化しつつある。川岸の工場の跡地は次々と文化活動の拠点に転換され、毎年、数百万人の市民が到来する人気の場所に変貌している。

ハンブルクは人口二〇〇万人弱でドイツ第二の都市である。中世後期に結成されたハンザ同盟の中心都市であったが、北海へ流出するエルベ川沿いにあるため、ドイツ最大の港湾都市でもあった。筆者が五〇年以上前に訪問した時代には、港湾周辺は工場が集中した工業地帯であったが、現在では光景が一変し、川沿いは公園に整備され、その背後には奇抜なデザインのオフィスビルが林立

する異質の空間に変貌している。

水辺が先端となる時代

日本でも同様の変化が発生している。殖産興業を重要な国家目標とした明治時代以後、多数の都市の川岸や海岸はニューヨークやハンブルクと同様に工業の利用に提供され、背後の都市に生活する人々の利用を阻害してきた。しかし、近年になり急速に変化している。一例として東京の湾岸の晴海地区の用地は高層住宅の林立する人気の住居地区となり、多数の購入希望が殺到して高率の抽選となったほどである。

それを象徴する言葉として登場したのが「ミズベリング」である。この新語は水辺（ミズベ）が、市民や企業、行政の連携の輪（リング）に

よる、さまざまな社会活動の場になるという意味である。前述した海外の港湾地区の利用目的の転換の歴史でも明確であるが、都市に直結する水辺は長年、工業発展のために利用されてきたが、現代の産業の中心である情報産業など三次産業は水辺である必要はない。それならば水辺を日常生活のために解放しようという発想が登場してきた。

この理念は日本では一九九七年に実施された河川法の改正に明示されている。河川を整備・保全する際、従来の治水・利水という目的だけではなく、自然環境や社会環境の保全も考慮することが記載されたのである。この理念を河川だけではなく、海岸や湖岸などにも拡張して、さまざまな水辺を実現するという発想が二〇一〇年代から登場したミズベリングであり、それを事態にする多様な事業が各地で実現している。

時代の変化を象徴する ミズベリング

神戸港は貨物取扱量で日本有数の

港湾であるが、奈良時代からの歴史のある港湾でもある。阪神・淡路大震災から三〇年が経過した今年四月、第二突堤に「TOTTEI PARK」という緑地が実現した。突堤の先端には、鉄骨で構築した巨大な三角形の人工の丘陵「緑の丘」が造成され、眼前の海面を眺望しながら広場での催事を観覧する場所になっている。工業社会の港湾が、情報社会の緑地に一変したミズベリングである。

東京の隅田川の右岸には江戸時代に「浅草御蔵」という幕府の米蔵が設置され、全国から輸送されてくる数十万石の米を貯蔵する場所であった。明治時代以後は、資源や製品の輸送の利便から多数の工場が川沿いに建設され、水質悪化が問題となっていた。日本が工業社会から情報社会に移行を開始した一九八〇年代に「大川端作戦」が立案され、工場が移転した跡地を公園や住宅団地に転換し、人々が川岸を散歩する空間に変容した。

越後平野を流下する信濃川は日本

最長の河川であり、最後は新潟市に到達し日本海に流入する。その河口部分の岸辺は散歩程度にしか利用されていなかったが、二〇一一年に規制が緩和されてさまざまな活動に使用することが可能になった。それを契機に二〇一五年から官民協力によりミズベリング・プロジェクトが始動し、市民がキャンプをするだけではなく、ヨガ教室やプロレス試合などのイベントも開催される活発な川岸に変貌している。

大陸の河川と相違して日本の河川の大半は急峻な山岳地帯から一気に平地に流下してくるため、河川は水害との関係が重視されてきた。しかし河川の管理が進歩してきた現在、河川を生活環境の一部として見直す動向が顕著になっている。それを要約する言葉がミズベリングである。この和製英語は、長年の河川についての視点とは相違する視点を提供してくれる単語であり、環境問題や気候問題が社会を左右する時代のキーワードとなる。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究することともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。